

式子内親王御詠草(三)

土田龍太郎

をりをりのおもしろきけしきを謳ひたまへること右に列ねし五首にさしも變らねども、詠みざまひとへに同じにてもあらず、なにとやらむもの思はしげなるけはひそひたる内親王の四季の御讀くさぐさ今に傳はりたり。かかる御詠いとあまたなれども、左にはしばらく五首ばかり引かばことたりなむ。

霞とも花ともいはむ春の雲

むなしき空にまづしるきかな

暮れてゆく春のなごりをながむれば

霞のおくに有明の月

歸る雁すぎぬる空に雲消えて

いかにながめむ春のゆくかた

峰の雪まだふる年の空ながら

かたへかすめる春のかよひぢ

今櫻さきぬと見えてうすぐもり

春にかすめる世のけしきかな

言はでやみなむはくやし、されどあらはにはえ言ことに出づまじきあやしき思ひの内親王の胸にきざせるをりのありけむこと、この五首のみにても知るをうべし。かかる思ひ、いともかそけくはかなければ、ただそのときのさせることなきけしきよせてさりげなきままにほのめかすほかに胸の煙をはらしたまふよすがさらになかりしにたり。

右の五首にたぐへつべけれど、なほあはれまさりておぼゆるは、左に掲ぐる五首にて、ここにては内親王、つるる思ひにしのびかね四方よものけしきを眺めたまふに、わが魂の空のかなたにゆくへも知らにあくがるがになりぬるをりさへありしことおしはからるる心ちぞする。

ながむればわが心さへはてもなき

ゆくへも知らぬ月のかげかな

うき雲を風にまかする大空の

ゆくへも知らぬはてぞかなしき

しるべせよあとなき浪にこぐ舟の

ゆくへも知らぬ八重の潮風

思へどもこよひばかりの秋の雲

あけゆく空にうちながめつつ

秋はただ夕べの空のけしきこそ

その色となくながめられけれ

かかる御歌たけ高く情あまりていみじくあはれなれども、そのあはれのつひのはてを究めぬるほどにありがたくおぼゆるは、左に添ふる二首にほかなかるべし。

花はちりてその色となくながむれば

むなしき空に春雨ぞふる

ながむれば思ひやるべきかたぞなき

春の限りの夕暮のころ

この兩首に内親王のこめたまひし御思ひの深きことげにそこひも知られねば、ただおそろしとばかり云ひてやみなむにしかじかし。

式子内親王集といへるこの姫宮の家集、宮内廳書陵部に藏をさまれど、今その影印本に載れる三百七十首にあまる御讀草を一わたり閱けみしまゐらするに、風體さまさまにて歌柄つねに同じとはえしも云ふまじけれども、なべてやさしく奥深くよしありげなる御歌の少からぬは、世にならびなきまでに氣高きこの宮に生れつきたる御人となりによれること疑ひなかるべし。

この内親王、所と時を隔つるの遠き方をひたぶるに戀したまひて、その募る戀しさにえ耐へぬをりのありしこと、家集のここかしこにしるけれど、かかる心ならひのけにてもやありけむ、ゆくへも知らぬ空のかなたにわが魂の離さかりゆくがにおぼえたまへることありしは、右に列ねし七首にて知るをうべし。またあるときは、去にし昔の戀ひしきに耐へぬ思ひを口ずさみたまふこと少らざりしなり。さらにかかる御歌の内より、過ぎし日のはかなき戀を讀みたまへる四首ばかりはすでに引きたれど、それらに加へてさらにあげまほしき御歌くさぐさありて、左にはまづ四首ほど引きみるべし。

古へにたちかへりつつ見ゆるかな

なほこりずまの浦の波風

つらしともあはれともまだ忘れぬ

月日いくたびめぐりきぬらむ

忘れてはうちなげかるる夕べかな

われのみ知りて過ぐる月日を

ながむれば見ぬ古への春までも

おもかげかをる宿の梅がえ

これらにたぐへつべくも見ゆれども、まことにさらにひとときは卓すぐれたる歌と云ひつべきは

それながら昔にもあらぬ秋風に

いとどながめをしづのをだまき

といへる一首にて、これをここにわきてつぶさにけみせでやみなばなかなくやしかりなまし。

ここにて内親王、伊勢物語に載れる

古へのしづのをだまきくりかへし

昔を今になすよしもがな

の一首を本歌としたまひしにまぎれなければ、下の句ばかりはさしも解きがたからず。いささか捉へにくきは上の句にて、美濃の家づとには左のごとくに釋きなしたり。

わが身も昔のわが身、秋風も昔の秋風のままながら、わが身のうへの、昔のやうにもあらぬにつけて、秋風のかなしさも昔にはまさりて、いとどながめをするとなり。

ここにて鈴屋大人、初句それながらを内親王のわが身と秋風とにかけて、わが身も秋風も昔のままなるに、の意こころにとりたれども、つづけて、わが身のうへの昔のやうにもあらぬにつけてと云へるは、二句、昔にもあらぬを秋風ならで内親王の御身にかけて解きなしたるにまぎれなし。さはれ二の句より三の句にかけて、昔にもあらぬ秋風と續きたれば、昔にもあらぬが内親王の御身を指せりとはえしも思はれず。もはら秋風にかかる句なること疑ひなし。されば鈴屋大人の釋けるままにては詞ことばのつながりとのはず、一首のおもむきさへ捉へがたければ、いかにとも従ひがたくなむある。

秋風のこと初句にはそれながらと昔のままなることを云へれども、そをやがて言ひ消つがごとくに、二句三句にては昔にもあらぬ秋風と續けたるはそもいかなるゆゑにやあらむ。秋風のけはひのなつかしきに、ある古き日のことの思ひおこされて、昔のそのをりにふと返りぬる心ちのきざせども、そはただ刹那ばかりにて、次の刹那には現うつし心に戻らでやはあるべき。時の流れに逆ひて今を昔になすよしあるべくもあらず。いかに昔を戀ふるとも、今吹く秋風の昔の秋風と同じかるべきことわりしなれば、昔にもあらぬ秋風とあきらめつつ思ひわぶるほかなきときは、えもいはぬ悲しみのいとどつりてやるかたもなし。

わづか刹那にてもあれ、今や昔、昔や今と惑はしめ、しばしばかりは今の昔に還るがにおぼえしむるは、時の移るひに潛みたるいともあやしきわざなれども、なべての人の智慧

もては及びがたきかかるくすしきさかひをわづか三十一文字に示しためへる内親王のいさをしめでたしともめでたし。

新古今集秋の部に入りぬるこの御歌、戀の歌にてはあらねども、かの在五中将の、月やあらぬ春や昔の春ならぬと詠めける一首におもむきあひかよひて聞ゆるは、われひとりの思ひなしにてもあらじ。式子内親王も在原業平朝臣も、今と昔のけぢめへだたりのえ思ひ分かれぬあやしきさかひに入りぬるをりのありしなるべし。

(令和四年二月二十一日受附)